

A 語句の意味と読み

(1) 読み＝えんしょう／意味＝猿の鳴き声（長く引く猿の声）。／★歴史的仮名遣いでは「ゑんせう」。「-eu」は「-よう」に直すので「せう→しょう」。長江の三峡の猿の声は、古くから旅人の悲しみをさそうものとして詩によまれる

(2) 無辺＝果てしなく広いこと。見わたすかぎり限りがないこと。／落木＝散り落ちる木の葉。落ち葉。／次の句の「不尽（＝尽きることがない）」と対になる語。どちらも「限りがない」ことをいう

(3) 読み＝④しょうしょう／⑤こんこん。「蕭蕭」は木の葉がものさびしく、はらはらと散り落ちるさま。「滾滾」は川の水が勢いよく、絶え間なく流れ来るさま。／★どちらも同じ字を重ねた語（疊語）。「せう」は「しょう」に直す。散って終わる落ち葉と、尽きずに流れ続ける大河とが対になっている

(4) 読み＝ひしゅう／意味＝もの悲しい秋。秋をもの悲しく感じること。／★「しう→しゅう」と直す。中国の詩では、秋は衰えと別れを思わせる悲しい季節としてよまれる

(5) 人の一生。生涯。（「百歳」という具体的な年齢のことではない。）／★前の句の「万里」が空間の隔たりを表すのに対し、「百年」は時間の長さを表す

(6) 苦しみ。困難。つらい目にあうこと。／「艱」も「難」も、なやみ・くるしみを表す字。ここは流浪と病に苦しんだ人生をいう

(7) 読み＝ろうとう／意味＝おちぶれて、やつれ衰えたようす。失意で気力も落ちた状態。／★「らう→ろう」「たう→とう」と直す。老い・病・貧しさの重なった晩年の自分をいう語

B 句法・漢詩の形式

(8) 七言律詩／韻字＝哀・廻・来・台・杯。（第一句末と偶数句末で韻をふむ。）／★七言の詩は第一句末も韻をふむのが原則なので、「哀」を落とさない。書き下し文では第六句が「独り台に登る」で終わり「台」が句末に来ないので、韻字は必ず語注の白文の句末で確かめる

(9) 「渚」と「沙」（水辺の景物どうし）、「清く」と「白く」（そのようすを表す語どうし）が対応している。／第一句「風急に天高くして」も同じ作り（「風」と「天」、「急に」と「高く」）。この詩は句の中にも対を仕込んでいる

(10) 無辺の落木蕭蕭として下り／無辺⇔不尽、落木⇔長江、蕭蕭⇔滾滾、下り⇔来たる。語の位置がそのまま対応する

(11) 万里悲秋常に客と作り／万里⇔百年、悲秋⇔多病、常に客と作り⇔独り台に登る。語の位置がそのまま対応する

(12) 読み＝はなはだ／副詞で、「ひどく・つくづく」と程度を強める働き。「苦しむ」の意味ではない。／★最頻出。「艱難苦だ恨む繁霜の鬢」＝度重なる苦勞のせいで白くなった髪を、つくづく恨めしく思う

(13) 第一・二句（首聯）と第七・八句（尾聯）もふくめて、八句すべてが対句になっている点。（このような作りを「全対格」と呼ぶことがある。教科書によっては触れないので、お使いの教科書の説明に合わせることに。）／★「対句は頷聯と頸聯だけ」と思いこむと落とす問題。まず八句を並べて見比べること

C 主語・指す内容

(14) 「客」は作者杜甫自身。故郷を離れて他郷にいる旅人・寄寓の身であることをいう。「作」は「作（な）り」と読み、「～になる」の意。／★「作」を「つくる」と読まない。訓読では「作（な）ル」。ここから詩の目が風景から作者自身へ移る

(15) 高台。高い所。詩の題名「登高」も「高い所に登る」ことをいい、この句と重なる。／長江のほとりの高台にただ一人で登り、そこから秋の景色を見わたしている場面

(16) 作者杜甫自身の鬢（耳ぎわの髪）。／後半の四句は、すべて作者自身の境遇を述べている

(17) 停めたのは作者杜甫自身。「停む」は「やめる・断つ」で、酒を飲むのをやめたということ。／★「飲みはじめた」と反対に取るミスが多い。「新たに」は「つい最近・～したばかり」の意

D 口語訳

(18) 風は激しく吹き、空は澄みきって高く、猿の鳴き声が悲しげに響く。／三つの短い情景を重ねて、秋の荒涼としたようすを一気に描いている

(19) 尽きることのない長江（揚子江）の水が、とうとうと勢いよく流れて来る。／散って終わる落ち葉と、尽きずに流れ続ける大河との対比になっている

(20) 故郷から万里も遠く離れた地で、もの悲しい秋に、いつも旅人の身であり続け。／「万里」＝故郷から遠く離れていること。「客」＝旅人・他郷に身を寄せる者

(21) 度重なる苦勞のために霜のように白くなった耳ぎわの髪を、つくづく恨めしく思い。／★「苦だ」は「はなはだ（ひどく・つくづく）」。「苦しむ」と訳すと即アウト。「繁霜の鬢」＝霜が一面に降りたように白くなった耳ぎわの髪

E 内容・記述

(22) 「万里」は故郷から遠く離れているという空間（距離）の隔たりを表し、「百年」は人の一生という時間の長さを表す。空間と時間の両面から、流浪の長さとしの深さを言い表している。／★頸聯は「万里⇔百年」「悲秋⇔多病」「常に客と作り⇔独り台に登る」と、きれいに対応している

(23) 霜が一面に降りたように白くなった、耳ぎわの髪。苦労を重ねて白髪が増えたことを、霜にたとえて言っている。／「繁霜」＝一面に降りた霜。「鬢」＝耳ぎわの髪。白髪を霜に見立てるのは漢詩の定番

(24) 老い衰えたうえ病のため、慰めであった酒さえ断たねばならない境遇。（三十二字）／★「濁酒」は粗末で安い酒。貧しい暮らしにじむ。最後の慰めまで失ったところで詩が終わる

(25) 前半の四句は、風・空・猿の声・川岸・白い砂・鳥・散る落ち葉・流れる長江といった、雄大でありながらもものさびしい秋の情景をよむ。後半の四句は、故郷を遠く離れた流浪、老い、病、白髪、断酒という作者自身の境遇をよむ。悠久で雄大な自然と、衰えていく孤独な自分とを対比させ、晩年の孤独と人生のやりきれない悲しみをうたっている。／★前半＝景、後半＝情の構成。答えには必ず「対比」を入れて書く

F 文学史・作者

(26) 唐（盛唐）の詩人。「詩聖」と呼ばれる。（「詩仙」と呼ばれる李白と並び称される。）／安史の乱の中で官職を捨て、家族を連れて各地を流浪した。『登高』は晩年、長江上流の夔州（三峡のあたり）での作とされる

(27) 読み＝とうこう（歴史的仮名遣いでは「とうかう」）／「高い所に登る」こと。中国には陰暦九月九日の重陽の日に高い所に登る風習があり、この詩もその折の作とされる。／高台に登って遠くを見わたす場面だから、前半に雄大な秋の景色が広がる

(28) 春望／『登高』は七言律詩、『春望』は五言律詩。どちらも杜甫の代表作としてよく並べて問われる

【現代語訳（全文）】

風は激しく吹き、空は澄みきって高く、猿の鳴き声が悲しげに響く。
川岸の水は清らかで砂は白く、その上を鳥が飛びめぐっている。
見わたすかぎり果てしなく、木の葉がものさびしくはらはらと散り落ち、
尽きることのない長江（揚子江）の水が、とうとうと勢いよく流れて来る。
故郷から万里も遠く離れた地で、もの悲しい秋に、いつも旅人の身であり続け、
一生を病がちで過ごしてきたこの身で、ただひとり高台に登る。
度重なる苦労のために霜のように白くなった耳ぎわの髪を、つくづく恨めしく思い、
おちぶれ衰えたわが身は、つい最近、濁り酒の杯までやめてしまったのだ。